



第 18 回

次代につなぐ五輪の“レガシー”

後藤 忠治

goto tadaharu

2020年、56年ぶりに東京にオリンピックがやってくる！ 2013年9月8日午前5時20分（日本時間）、ブエノスアイレスでの第125次IOC（国際オリンピック委員会）総会で、緊張感が極限まで張り詰めた空気の中、「オリンピック賛歌」が響き渡った。それに続いて、ジャック・ロゲIOC会長（当時）が第32回夏季オリンピック・パラリンピック競技大会（2020年）の開催都市を読み上げた。「TOKYO!」 スポーツ界のみならず、オール・ジャパン体制で続けてきた招致活動が実り、遂に悲願がかなった瞬間だった。

『スポーツ歴史の検証』に登場して下さったゲストの方々は、口々に「現在の日本のスポーツ界は、1964年の東京オリンピックのレガシー（遺産）の上に成り立っている」と証言している。56年の時を経て、日本は遂に、新たなレガシーを育む機会をつかんだのだ。2020年7月に向け、今後、日本は力強くアクセルを踏み込んでいく。次世代の人たちに少しでも多くの“レガシー”という櫛（たすき）をつないでいくために。

今回、登場いただく後藤忠治さんは、東京オリンピックのレガシーを体現されているお一人だ。東京大会では競泳に出場。その経験を踏まえ、体系的な強化の必要性を痛感し、セントラルスポーツクラブを創業した。

そんなスポーツクラブのパイオニアである後藤さんに、東京オリンピックの思い出、スポーツクラブを立ち上げるに至った経緯、経営にあたってのご苦労、今後のスポーツ界に期待することなどを伺った。

聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

水泳か卓球なら 世界に通じる

— 後藤さんは1964年の東京オリンピックの競泳に出場されたオリンピックです。自由形でしたね。

はい、100m自由形と4×100m自由形リレーに出場し、リレーで4位でした。

— その後、スポーツクラブである「セントラルスポーツクラブ」を創設し、選手の育成に着手されました。今は子どもや若者だけでなく、お年寄りもスポーツクラブで体を動かすことを楽しむ時代です。このように、以前よりも確実に“間口”が広がっていますね。

スポーツクラブという存在は、国民の皆さんによって機能させていただいているといえます。

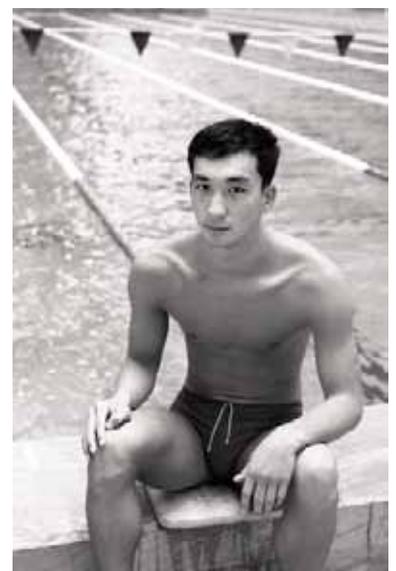
— 私の家内はスポーツ音痴なのですが、このシリーズを楽しみにしております。「今日はスポーツクラブの社長さんがゲストだよ」と申しましたら、「セ

ントラルスポーツというクラブがあったわね」と言いましたね。「おまえ、よく知っているね」と少し驚きました。

クラブ名を知っていたというのはうれしいですね。

— 水泳は小さいころから？

母親が自分はやらないのに、小学校2～3年のころ、私に「忠治、スポーツをやるなら、世界に通用する水泳か卓球はどう？」と勧めてきました。私は泳ぐほうが好きだったので、結果的に水泳をやることになりました。



東京オリンピック事前練習にて

古橋廣之進さんに憧れて

— お母さまはスポーツ好きだったのですね。



古橋廣之進氏(右)と

そうですね。私が小さいころは、「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた古橋廣之進さんが活躍されていました。家族と一緒に、鉱石ラジオを耳に当てて、短波放送で古橋さんの活躍を聞いた思い出があります。国民的英雄で神様のような存在と感じていました。

— 当時、真空管のラジオでもなかなか聞こえなかったのですよね。1948年のロンドンオリンピックに日本は出場できず、戦後初めて出場したのが1952年のヘルシンキ大会でした。そのときには、「シューシュー」という音の合間に、「古橋敗れました」というアナウンスが聞こえたものでした。

そうでした。途中、途切れたりしましてね。私は「古橋さん」という名前に憧れを抱くことで、水泳に関心を持っていきました。

「矢切の渡し」を泳いだ少年時代

— それまで水に親しむ機会はあったのですか。

私、小学校2年生から「フーテンの寅さん」で有名な葛飾柴又に住んでおりました。江戸川のあの「矢切の渡し」を泳いでいたのです。

— へえ、「矢切の渡し」は泳ぐことができたのですか。

水戸街道と千葉街道、江戸川でいえば市川橋と葛飾橋の間は、私が小学校6年生まで、夏場は泳いでよかったです。泳ぎの得意な父に連れられて、私も泳ぎました。

— お父様はどちらの出身ですか。

大分県竹田市です。急流の川で泳ぎを覚えたそうで、父は私と泳ぎに行くと、ぼんと飛び込んで姿を消すのです。私は父が飛び込んだ場所をじーっと見つめて浮かび上がるのを待ちました。しかしいつまでも浮かんでこない……。どうしようと思ったら、流されて何百メートルも先を泳いでいたなどということがよくありました。

— 驚いたでしょう。

それを見ていて、錯覚しておぼれそうになったことがありますよ。足が着きませんから、手を上げて一生懸命呼吸しようとしています。水の中から見上げる水面はキラキラと輝いていて、瞬間的に「あ、これで死ぬんだ」と思いました。そのとき、誰かが引っ張り上げて助けてくれました。



柴又小学校時代(前から二列目右端)

高校時代はバレーボール部で身長が伸びる

— 江戸川で泳ぎを覚えた後藤さんがオリンピック選手になるまでには、どのような過程があったのでしょうか。

小学校には15メートルの防火用水というか小さなプールがありました。

中学では水泳部に入っていました。学校にプールがなかったので小学校のプールを借りていました。実は白状すると、遊泳禁止になってもなお江戸川を何度か泳いだことがあります。今だったら大変ですね。別に水泳の選手になりたいと思ったことはなく、夏になるとただ泳ぐのが好きでした。



東京オリンピック水泳日本代表チーム(前から2列目左から二人目)

— では高校時代は？

やはりプールがなかったので、バレーボールをやりました。関東大会ぐらいまで勝ち進み、大学から勧誘を受けました。

— そう言えば、後藤さんは長身ですね。何センチですか。

182センチです。バレーボールを始めて急激に伸びました。

村上勝芳監督のたった一つの技術的アドバイス

しかし、勧誘を受けた大学に入学せず、日本大学に行くことになりました。

それはひょんなご縁でした。私が本格的に水泳選手として練習を始めたのは、日大の水泳部に入ってからなのです。

— それまでは指導者もいないまま、一人でクロールを泳いでいたということですね。平泳ぎや背泳ぎはどうでした？

形を意識して泳いではいませんでしたから……。自由形もクロールというより抜き手ですね。

— 大学生からのスタート、ずいぶん奥手なオリンピック選手ですね。

私を日大に誘ってくださった村上勝芳監督のお陰です。

— 村上さんは古橋さんや橋爪四郎さんが出場した全米水泳選手権(1949年)にコーチとして帯同されていて、日大水泳部の監督であり、東京オリンピックでは男子競泳ヘッドコーチを務められたのですよね。

はい、その村上さんに泳ぎを見てもらったご縁で、「おまえ、来いよ」と誘われて、それが始まりでした。

— 村上監督との出会いは大きいものでしたか。

それはもう。他の選手たちは「怖い」と言っていたのですが、私から見た村上さんは存在感はありましたが、怖いという印象ではありませんでした。そんな村上さんが、4年間で私にしてくださった技術指導はたった一言だけでした。

— その一言とは？

「たまには顔を左に上げてブレスしろ」です。私は右側ブレスでしたが、村上さんがそう言った指導の意味を考えたのが大変でした。

— どんな意味でしたか。

「バランス良く泳げ」ということです。左右でブレスしなければならない、という意味ではなく、流体力学上、水の抵抗ができるだけ少ない泳ぎを考えろという意味だととらえました。顔を右にも左にも上げることで、バランスのいい泳ぎ方になるはずなのですが、これがなかなか直らないのですよ。理解はできても、記録を意識するとどうしても元の泳ぎに戻ってしまいます。矯正に努めましたが、ちょっと傾いて体が曲がった形になっていたと思います。

二人の大先輩、古橋廣之進さんと橋爪四郎さん

— 子どものころ憧れていたという古橋さんは日大のOBですから、後藤さんは古橋さんの後輩になられたのですよね。「魚になるまで泳げ」とか言われましたか。

はい。でも私が日大水泳部に入ったとき、古橋さんは実際の指導はされていませんでした。男子のコーチをされていたのは橋爪さんで、お二人にお会いしたときは、“生き神様”のように感じました。写真を撮り、食事に同席させてもらったときに、橋爪さんから伺ったお話があります。橋爪さんと古橋さんはよく“ライバル”と見られていましたが、実は橋爪さんにとって古橋さんは“恩人”だということでした。

— そうですか。

古橋さんと橋爪さんは同い年で、誕生日も1週間程度しか違います。ただ橋爪さんは和歌山の水泳大会で古橋さんに見出されて日大に入学したので、学年でいうと1年後



古橋廣之進氏(左)と橋爪四郎氏

輩になるそうです。「古橋さんが誘ってくれなかったら今の自分はなかった。ライバルなんてとんでもない、恩人なのだ」とおっしゃっていました。

— 橋爪さんは、古橋さんをととても尊敬していらっしゃるようですね。

はい。橋爪さんは今でもお元気で、週に1~2回はゴルフに行かれています。

— それはうれしいな。

大学4年間で オリンピック代表の座をつかむ

— 東京オリンピックの代表に選ばれる自信はありましたか。

大学に入学した時点で、大学卒業直後に開催される東京オリンピックを見据えていました。在学中の丸4年でオリンピックに出場しようというのですから、図々しい話ですよ。でも自信はなくても、4年後、何が何でも出てやろうとは思っていました。

日本代表チームの強化選手は、村上さんが他のコーチたちと決めたそうです。そのときに「後藤、頑張れよ、選んだからな」という言い方でした。「選ばれた」ではなく……。

— ああ、村上さんが「選んだ」と。

ええ、それは非常に大きな励みになり、「よし!」という気持ちになって、4年間で日本記録を出してオリンピックに出場することができました。

— 地元・東京のオリンピックで、気持ちの高ぶりは感無量だったでしょうね。

はい。ただ競泳全体からすると、銅メダル1個の成績にとどまってしまいました。

— 男子4×200メートルリレー（福井誠・岩崎邦宏・庄司敏夫・岡部幸明）でしたね。



東京オリンピック事前練習にて(左)

日本競泳界の未来を憂えて 「代々木スイミングクラブ」が スタート

— 東京オリンピックは日大卒業後ということは……。

はい、大丸に就職していました。アマチュアスポーツの選手は大学を卒業したら、職業に就き、現役引退後しっかりと生活していけるようにしておかなければいけないと、私の父は常々そう言っていました。

オリンピックチームの総監督は高石勝男さんで、私は「メキシコまで十分いける」とも言われましたが、「いつまでも水泳をやるわけにはいかない。仕事をしなければ」という思いで、東京大会後、スパッと引退。大丸を退職し、東京工機というところで5年間働きました。そのあと、今の仕事を始める転機となったのがまた村上さんなのでした。

— どのようなきっかけでしたか。

オリンピックプール（国立代々木競技場第一体育館）には試合用のメインプールのほか、練習用の50メートル×6コースのプールがあるのです。

東京オリンピック後の日本競泳界を憂えた村上さんは、ご自分でそのサブプールの入場料を負担して、子どもたちの水泳教室を始めました。次第に親御さんたちがお礼の品物を持ってくるようになり、「これはまずい。一定の金額を徴収したほうがいい」ということになり、「代々木スイミングクラブ」を誕生させました。

— ああ、そんなことがあったのですね。

私も見学に行きました。幼児の頃から育てなければダメだと、エイジグループを指導していました。東京オリンピックの成績不振は私たち選手が不甲斐なかったから。それなのに村上さんは一身に責任を負い、選手育成に情熱を注いでおられました。そんな村上さんの姿を見て、私もまたスイミングクラブを起業しようと思いついたのです。

選手になるときも、この仕事をするときも、村上さんに相談に乗ってもらいました。

— 後藤さんの人生のステップで、いつも村上さんがかかわっていらっしゃるんですね。

はい、ですから村上さんは私の人生の大恩人です。



東京オリンピックの水泳競技が行われた代々木第一体育館

「セントラルスポーツクラブ」を28歳で起業

— セントラルスポーツクラブの創業は何年ですか。

1969年です。体操の小野喬さん・清子さんご夫妻、遠藤幸雄さんらとともに立ち上げました。選手の育成という大目標がまずあり、企業という意識は薄く、はじめは理事制を敷いてのスタートでした。

— 体操の方と組まれたのですね。

皆さんの力を借りないと経営は成り立たないという考えは、自分の中に染みついていましたね。



セントラルスポーツ発足式にて

それが少しして見直しに迫られました。それこそ村上さんの考えを具現化し、将来を見据えて選手を育てていくのであれば長期の視点が必要です。そして何より財政基盤がしっかりしていなければなりません。どのように運営していくか。小野さんたちとも相談を重ね、翌1970年5月13日に株式会社化し、「株式会社セントラルスポーツクラブ」になりました。

— 企業化は後藤さんの考えだったのですよね。

そうせざるを得ませんでした。公益法人化しようとしても資金がない。補助金をもらえるわけでもない。自分たちで収入を上げ、その浄財を基に選手をつくらうというイメージです。

— スポーツクラブの企業化というのは初めての試みでしょう。

当時はそうですね。代々木スイミングクラブの他にもいくつかスイミングクラブはありました。ただ選手をつくるには、小さな器からではなくできるだけ大きな器の中から発掘しないと難しいので、拠点を増やして可能性のある選手を探していこうなどと、いろいろ考えて実践しました。

— しかもし災害が起きたらなど、リスクヘッジも考えていかなければなりません。

その通りです。選手の発掘、コーチの育成もあります。異なる地域出身の人材を意識的に採用し、出店するときは土地勘のある人間を登用するようにもしました。

一生涯の健康づくりへの貢献

— 「競技スポーツと生涯スポーツの発展は車の両輪」とよく言われます。当初、競技力向上を目標に立ち上げたスポーツクラブに、生涯スポーツや健康づくりの概念はどのように織り込まれていったのでしょうか。

現在、当社のスポーツクラブに通っているお子さんの平均年齢は7.3歳です。スタート時は10歳でした。10歳の子どもたちが、20年経ったとき、体力の低下を自覚してまたスポーツクラブに戻ってくるのではないかと考えました。スポーツクラブは子どものためだけでなく、大人のためでもあることをスタート当初から構想として持っていたので、かつて自分が育ったスポーツクラブで水泳や運動を再開したい、と思うのではないかと。

— 大人になってからのことまで……。

ですから、全会員の会員番号を永久番号制にしてあります。当初はコンピューター管理ではなく手書きだったので、管理の都合上の必然性もありましたが、かつて会員だった方に、「スポーツクラブに戻ってきませんか」というアプローチをしていこうというのは念頭にありました。



セントラルスポーツ水泳教室

— 退会したあとも番号はずっと空けてあると……。そこに生涯スポーツの概念が息づいていますね。

“エアロビクス運動”を取り入れ “フィットネス”という名称を用いる

当初、スポーツクラブはスクール主体でした。それが1970年代に入り、専用の設備を持つスポーツクラブが次々とオープン。当社では、1976年にオープンした「セントラルスイムクラブ千葉」が自社所有1号店です。

— 後藤さんが社長に就任されたのは1977年でしたね。そのころ、海外からエアロビクス運動を取り入れたそうですね。

スポーツクラブの先駆者である米国の経験を日本に取り入れようと、IHRSA (International Health, Racquet&Sportsclub Association) という組織に加盟していました。

エアロビクス運動は、米国のケネス・クーパーという医学博士が有酸素運動のプログラムとして提唱したものです。テキサス州ダラスにケネス・クーパー研究所があり、1981年にはクーパー氏が来日し、講演を行い、エアロビクス運動と健康づくりの大切さを説きました。ドイツにはクーパー氏とは若干理論の異なるエアロビクス運動があり、今の主流はそちらになっています。クーパー氏は途中で理論を変えたようですね。

— 海外の情報をいち早く取り入れることが求められるのですね。

ええ、先端の情報を得るために投資もしています。エアロビクス運動については今後、主流になると思ったので、継続的に情報を取り入れ活用するようにしています。ただ日本とはスポーツに対する意識や文化が異なるので、日本ナイズさせるように心がけています。



セントラルスポーツ・エアロビクス

— 日本独自のスポーツ文化の特徴はどこにあるのでしょうか。

スポーツという言葉を知ると、どうしても“競技スポーツ”が先に浮かぶのではないのでしょうか。スポーツに親しむことで、健康を維持して医療費も抑えられる。その部分の理解をもっと広げていく必要があると思っています。

— “フィットネス”という言葉は初めて使ったのも御社だそうですね。どこから持ってきたのですか。

1983年に日本初となる総合的なフィットネスクラブを新橋にオープンするにあたり、ネーミングを検討しました。米国でもスポーツクラブの名称は、アスレチッククラブと呼んだり、フィットネスクラブと呼ぶところもある。いろいろある中で、健康づくりをするためのクラブということで、フィットネスという言葉を選びました。

— なるほど。フィットネスという言葉は、社会の先端であり、人々の心をギュッとつかんだと思いますね。経営者としての素晴らしいセンスも感じます。後藤さん、学部はどちらですか。

商学部ですが、学生時代はオリンピックの合宿ばかりであり勉強はしていません。

— 泳ぐことで精一杯でしたか。

あと食べることでですね。

鈴木大地選手が ソウルオリンピックで 金メダル

— 1988年のソウルオリンピックの男子100メートル背泳ぎで、御社所属の鈴木大地選手が金メダルを獲得しました。後藤さんはいわば金メダリストの生みの親といえます。

鈴木大地選手を直接指導したのは、弊社の常務取締役であり、ナショナルコーチでもある鈴木陽二コーチです。鈴木選手のご両親が、彼が10歳ぐらいのとき、「指導をお願いしたい、息子を預かってほしい」と鈴木コーチのところに連れてこられました。

— 彼ははじめから光るものを持っていたのですか。

彼の泳ぎを見たときに素質を感じました。

— そのころからもう背泳ぎでしたか。

全部できていましたよ。スイミングクラブでは最初に自由形、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライの4種目全部を教えます。その中から一番得意な泳法である「スタイル1（ワン）」を総合的に判断して決め、その種目の練習を積み上げていくのです。バックストロークは肩の柔軟性が求められる泳ぎです。肩の軟らかさがポイントでした。

— 腕を後ろに回転するのに肩が軟らかいほうが有利ですね。



ソウルオリンピックで金メダルを獲得した鈴木大地選手

そうです。彼は今でこそ180センチぐらいありますが、当時は小柄で「大地」じゃなくて「小地」と言われていたぐらいでした。

— へええ。あの当時の強豪であった54秒台のタイムを持つバーコフ（米国）やポリャンスキー（ソ連）を向こうに回して、決勝ではバサロ泳法の距離を伸ばすという勝負に出ましたよね。すごい精神力だなと驚きました。

はい、予選では25メートルだったバサロの距離を決勝で鈴木陽二コーチと相談し、30メートルに伸ばしました。彼はバックで潜ったまま90～100メートル泳ぎ切ることができるのです。

— ターンしてまた潜り続ける？

はい、潜ったまんまでです。彼は決勝前のインタビューで金メダルへの秘策を問われ、「秘密」と答えて話題になりました。それは決勝でいきなり5メートル伸ばしたわけですが、そのように訓練されていたからこそ、日ごろ培っていた力を発揮することができたのです。

鈴木大地日本水泳連盟会長への期待

— その鈴木大地さんは、今や日本水泳連盟の会長さんです。鈴木大地会長には何を期待しますか。

個人的にもいろいろありますが、公的な部分で言いますと、日本の競技団体の中で水泳連盟というのは、歴史の上でも、オリンピックで獲得したメダル数でも、リーダー的存在です。そのポジションに恥ずかしくないよう、これからも範を垂れていかなければいけません。

競技力の面では、センターポールに日の丸を揚げるのが日本水泳連盟の目標です。それが就任していきなり「世界水泳バルセロナ2013」で、男子400メートル個人メドレーの瀬戸大也選手が金メダルを獲得してくれました。非常に喜ばしかったのと同時に、「やはり強運を持っているな」と思いましたよ。



スポーツ祭東京2013水泳競技で天皇后両陛下下へのご説明役を務めた鈴木大地日本水連会長

— 萩野公介選手もいますし、若くて楽しみな素材がたくさんいますね。

はい。2020年東京オリンピックという大きな目標ができましたから、そこを目指してリーダーとしての活躍を大いに期待しています。若い会長ですので、周囲の方々に支えたいと思わせる人間的な魅力を備え、決して奢ることなく、しっかりと地に足を着けて、水泳界を牽引していただきたいものです。

— 国民からの期待感もそうとう大きいものがありますね。

「富田が富田であることを証明すれば……」

— 2004年のアテネオリンピックでは、体操の富田洋之選手と鹿島丈博選手が男子団体総合で金メダリストになりました。

あれもうれしかったですね。

— あのと、テレビの実況で、NHKの後輩の刈屋富士雄アナウンサーが「栄光の架け橋」という名言を生みました。僕はあの言葉以上に、「富田が富田であることを証明すれば、日本は勝てます」というフレーズに感動しました。

「勝ちます」ではなくて「勝てます」でしたよね。

— そこですよ。彼は帰国して、自分の放送資料を放送博物館に提出しました。普通アナウンサーは、何か名言となる台詞を発したとき、「自然に出た」と見栄を張るものですが、彼は「栄光の架け橋」についてはある程度準備をしたものだと公開しました。立派な姿勢です。

でも「富田が富田であることを証明すれば……」の件については、「その場で何も考えず、自然に出た言葉でした」と言っていました。ああいう手に汗握る場面では、放送している人間も応援している皆さんと一つになるのですよね。

ああ、そういうものなのですね。富田選手や鹿島選手に聞いたことがあるのですが、体操という競技はシーズンオフがないのだそうです。「なぜないんだ、疲れてしまうじゃないか」と尋ねたら、「休むと手のマメがなくなってしまうから」ということだそうです。



アテネオリンピック体操団体で金メダルを獲得した富田洋之

— 体操は床、あん馬、つり輪、跳馬、平行棒、鉄棒と6種目もありますね。

富田選手や鹿島選手とご縁ができたのはどういうところからですか。

彼らは体操のNHK杯に高校や大学のころから出場していましたよね。テレビで観戦していたときに、かつて日本体操界のエースだった遠藤幸雄さんや加藤沢男さんを彷彿とさせる素晴らしいキレを感じて、彼らは今後、活躍しそうだなどピンと来ました。

鈴木大地選手を育てた鈴木陽二コーチも順天堂大学出身ですが、弊社副社長に順天堂大学の体操部出身者がおり、そのつながりからでした。

— 切れ味ですか。セントラルスポーツさんは「やるな」と思いましたよ。

永続性のある運営を

たまたま私は水泳出身ですし、小野夫妻は体操です。その両方でオリンピックの金メダルが取れて、こんな幸運はないですよ。当社の所属でオリンピックに出場した選手は延べ24人います。メダルのは数は金・銀・銅、どれも3個ずつになりました。

今後も、水泳と体操等の多くの種目でメダル獲得に貢献していきたいと思う一方で、選手育成をしつつ経営面での安定も求めていかなければなりません。

— 後藤さんは選手を指導する人材も育てていらして、選手づくりの面は問題ないとして、経営というのはまた質の違う難しさがあるのでしょうか。

どうしても相反する部分がありますね。選手を育てるにはある程度の費用がかかります。それでも原点は選手強化から始まっているので、歩みを止めることはできません。国民に夢や勇気を持っていただく選手を生み出したい。そこは求め続けていくつもりです。

— 夢を持っている人はたくさんいます。彼らの夢と後藤さんの夢を重ね合わせて、一つの花として咲かせていこうというのが、最初に目指したスポーツクラブ像だったかと推察します。それと比較して、今の状況はいかがですか。

現在は全国に約160店舗以上展開し、当初、思い描いていたスポーツクラブ以上のものになっています。しかしこれは永久に継続していかなければいけません。そのためにも、スポーツを愛好する一般の方々の底辺部分をさらに広げていきたいのです。

スポーツの語源は、ラテン語の“デポルターレ”（気晴らしをする、遊ぶ等）から来ています。デポルターレの精神を忘れることなく、選手を輩出し、国民の方たちの理解と共感をいただけるような運営をこれからもずっとやっていきたいですね。



新橋におかれていたセントラルスポーツ本社（現在は茅場町）

スポーツクラブの 将来像とは

— 日本におけるスポーツクラブの将来像についてはどのようにお考えですか。

もっと参加者を増やしていきたいですね。競技スポーツというハードルが高いように感じますが、生涯スポーツの観点からその意義を見つめると、健康が一番の財産なわけです。体を動かすことを楽しみながら、健康を維持して幸せな生活をおくる。そのお手伝いをするためにスポーツクラブは存在しています。

— 敷居が高いと感じてしまう人もいないのでしょうか。

あこがれの存在たるアスリートを育成しつつ、もう一方で一般の人がもっと気軽に、「あそこへ行けば楽しいな」と思っただけのような、ライフスタイルに自然に溶け込んだスポーツクラブが理想ですね。

— 僕は4年前、アイスホッケーのセレモニーの司会の最中に、左大腿を複雑骨折してしまいましたね。リハビリのためにスポーツクラブに行っているのですよ。水中ウォーク仲間に、たくさんのガールフレンドならぬバールフレンドがいます。

それはつまり、年配の女性ということですか。



水泳を楽しむ女性

— そうそう、僕と同世代の人たちです。水中ウォークが終わってから一緒にお茶を飲んだりして、ああ、これもスポーツクラブの良さだなと実感しています。

スポーツクラブは、コミュニティークラブとしての要素も持っていますからね。

スポーツを通じて学ぶ 人間教育

— スポーツクラブの意義に、人間教育の一面もあるとか。

もちろんあります。創業当初の企業理念は、「スポーツを通じて青少年の健全育成を行うこと」でした。その中に「情操教育」も含まれています。例えば、昨年のロンドンオリンピックで現地に行ったのですが、日本人と結婚しているイギリス人に「日本の選手はマナーがいいね」と言われました。

— どんな点でしょう。

何事かと思ったら、「レース前にプールに向かって一礼をして、終わってからも一礼をする。世界中でああいう姿は見たことがない」と感心していました。プールに入る前後にきちんとお辞儀をする、あれはもはや水泳“道”と呼んでいい領域かもしれません。

それと、スポーツクラブだからこそ学べる分野があります。「自分に挑戦し力を試すこと」もそうですし、「ルールを守る」「協調性を養う」といったことは、スポーツを通して小さいうちから体得できますよね。

— まさに、スポーツの得意ジャンルですね。

他にもあって、私どもでは、40年前から子どもたちをハワイにホームステイさせています。私は東京オリンピックの2年前、1962年にインドネシアで行われたアジア大会に日本代表として参加しました。そのときの経験から、幼いうちから国際人としての意識を植え付ける英才教育の必要性を痛感したのです。ですから、スポーツを通じての人間教育にも力を入れて取り組んでいます。

ナショナルトレセンと 民間スポーツクラブは 補完し合う存在

— 2008年にナショナルトレーニングセンターが開設されて以来、日本の競技力向上において成果を上げています。2020年の東京オリンピックが決まったことによって、更なるスポーツ環境の整備が見込まれますね。

ナショナルトレセンを拡充するという話もあるようですね。ナショナルトレセンには私ども民間にはない環境がそろっているので、非常に助かっています。ナショナルトレセンと民間のスポーツクラブの連携は、今後、より重要になっていくでしょう。

— どのように連携するのですか。

ナショナルトレセンには、ドクターやトレーナーなど医療面でのサポートがあります。栄養士さんによる食事のサポートも整っています。しかしエリートアカデミーは別として、選手に直接、技術指導をする指導者が常駐しているわけではありません。常に選手に寄り添い、見守り、指導し、コンディションを把握できているコーチという存在は、私どものような民間のスポーツクラブや学校、企業に多く所属しています。選手とその指導者がナショナルトレーニングセンターを活用することにより、ふだんの練習で足りない部分が補完されて、成長につながっていくのです。



成城にあるセントラルウェルネスタウン

セカンドキャリア、 現役を退いたあとも 活躍できる人材

— アスリートのセカンドキャリアについては、どのような取り組みをされていますか。

私どもは、1982年にセントラルスポーツ研究所を設置しました。鈴木大地選手を育てた鈴木陽二コーチが最初の研究所長でした。私が彼にお願いしたのは、「“歴史”をつくるだけではなく“伝統”をつくってくれ」ということでした。

— 伝統とはどんなことを指すのでしょうか。



潮田玲子氏

選手の競技結果は、年月が経てば一定の成果は出てくると予想していました。それが歴史です。しかし、「スポーツを辞めたあとのセカンドキャリア」については選手たちに強く意識づけをしなければならないだろうと。現役アスリートを辞めたあと、いかにより良く生きるかということですね。それが伝統です。スポーツをしている間だけでなく、辞めたあともしっかりと社会で活躍し貢献できる人間を育てていきたいという意味でした。

— その手応えはいかがですか。

2008年の北京オリンピックと、昨年のロンドン大会に出場した伊藤華英（はなえ）という選手がいます。引退したあと、日本オリンピック委員会2013年オリンピックアンバサダーに選ばれてね。「英語は大丈夫なのか?」と心配して聞いたところ、「はい、大丈夫です」と言うので

す。いつの間にかしっかりと勉強していたのですね。今はセントラルスポーツに籍を置きながら、早稲田大学の大学院で学んでいます。

彼女のように選手時代から高い意識を持って常識や能力を身に着けていくことがセカンドキャリアにつながりますので、私どもでも力を注いでいるところです。

スポーツを通じて 自分なりの“物差し”を持つ

— 後藤さんが考えるスポーツの価値とはどこにあるのでしょうか。

日本は法治国家です。法律に基づいて行動するのは当然のことです。スポーツも同様です。ルールを遵守して行うことが、スポーツの良さといえるでしょう。

日本水泳連盟では、オリンピックや世界選手権の選考レースで厳しい基準タイムを設定しています。たった100分の1秒差で出場できない選手がいる。なんて非情な世界だろうと切なくなります。ルールに従うのがスポーツです。ルールは必要に応じて変わります。変更されたらまた守る、そういうことが大事だと思っています。

— では、スポーツを通じて後藤さんが次世代に伝えたいことは何でしょう。

スポーツに取り組むことで、自分の力をとことん追求できますし、協調性も養われます。スポーツを突き詰めていくと、自分で気づいていなかった新たな可能性も発見できます。そのように、スポーツを通じて自分なりの“物差し”を持ってもらいたいですね。



後藤忠治氏

2020年東京オリンピック・パラリンピックに期待すること

— さあ、2020年に東京オリンピック・パラリンピックがやってきます。スポーツ基本法が改正され、スポーツ庁の設置に向けての動きが加速することが予想されます。スポーツ関連の省庁が一元化されることで、我が国のスポーツ振興にどのような影響があると思われますか。

エアロビクス一つを取り上げてみても、省庁の中で担当部署がまたがっている部分があります。それらを見直すことで効率よく機能できるようになりますね。学校に関するスポーツ担当部署も同様で、枠を取り払うことで健康維持・増進のためのスポーツ人口の増加の推進にもなるのではないのでしょうか。

— どんな東京大会にしたいですか。

敗戦から様々な紆余曲折を経て災害にも見舞われた日本が、国が一体となり力を合わせて、これだけ平和で素晴らしい国になれるよと世界に訴求できる大会がいいですね。経済も上げ潮ムードになって、アベノミクスの4本目の矢の推進力になっていくでしょう。7年という時間があるので、安定した経済成長につながれば復興を含めた国造りの面でも大きな意義があるはずです。

日本の政治・経済・文化・教育、あらゆる面にオリンピック・ムーブメントが浸透し、スポーツ文化が成熟して、爽やかな大会になればいいですね。



2020年東京を発表するJ.O.C会長

— スポーツの世界にスタンスを置きながら、実業の世界でもご活躍されている後藤さんだけあって、見方が広いですね。クラブスポーツは今後ますますその存在意義を高めていくことと思いますので、一層のご活躍を期待しております。

水泳の歴史

- | | | | |
|--------------|---|--------------|--|
| 1924
大正13 | 大日本水上競技連盟創設 | 1952
昭和27 | ヘルシンキ五輪開催 |
| 1927
昭和2 | 競技規定、クイックスタートに改正 | 1953
昭和28 | 国民皆泳行事開始 |
| 1928
昭和3 | アムステルダム五輪開催、
日本水連 FINA に加盟 | 1955
昭和30 | 第4回日米対抗開催、中学生通信競技開始
1955 日本の高度経済成長の開始 |
| 1930
昭和5 | 神宮外苑プール竣工 | 1956
昭和31 | メルボルン五輪で潜水泳法禁止、
バタフライ新種目 |
| 1931
昭和6 | 第1回日米対抗開催 | 1957
昭和32 | シンクロ選手権始まる
日本水泳指導者協会再発足 |
| 1932
昭和7 | ロサンゼルス五輪開催 | 1959
昭和34 | 第1回末弘室内選手権、第5回日米対抗開催 |
| 1935
昭和10 | 第2回日米対抗開催 | 1960
昭和35 | ローマ五輪開催 |
| 1936
昭和11 | ベルリン五輪開催 | 1961
昭和36 | 第1回全国中学選抜大会開催 |
| 1937
昭和12 | FINA 規則改正でデッドスタートに | 1962
昭和37 | 第4回アジア大会開催 |
| 1938
昭和13 | 東京五輪返上、団体長距離競泳、
女子水上体育大会開催
1941 後藤忠治氏、東京都に生まれる | 1963
昭和38 | ユニバーシアード開催、日豪対抗開催、
第6回日米対抗開催、東京国際水上 |
| 1944
昭和19 | 全国皆泳ラジオ水泳 | 1964
昭和39 | 東京五輪開催、代々木オリンピックプール
完成、日本水連 40周年記念会
1964 後藤忠治氏、東京オリンピックに出場
1964 東海道新幹線が開業 |
| 1945
昭和20 | 日本水泳連盟として再発足
1945 第二次世界大戦が終戦 | 1966
昭和41 | 学童泳カテストを開始 |
| 1946
昭和21 | 早慶戦、戦後初競技会、
第1回国民体育大会開催 | 1967
昭和42 | 東京ユニバーシアード開催 |
| 1947
昭和22 | 日本選手権、古橋 400m 自由形で世界新
1947 日本国憲法が施行 | 1968
昭和43 | メキシコ五輪開催
1969 後藤忠治氏、セントラルスポーツクラブを創業
1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸 |
| 1948
昭和23 | ロンドン五輪開催 | 1970
昭和45 | 選手登録制度実施
コンピューターにより記録整理実施 |
| 1949
昭和24 | 日本水連、国際水連に復帰 | 1972
昭和47 | ミュンヘン五輪、日本室内選手権、
日本年令別大会開催 |
| 1950
昭和25 | 第3回日米対抗開催、全国勤労者水上開始
1950 朝鮮戦争が勃発
1951 安全保障条約を締結 | | |

水泳の歴史

1973
昭和48

競泳記録 100分の1秒に。女子が日本学生選手権大会に正式競技、第1回世界選手権開催

1973 オイルショックが始まる

1974
昭和49

財団法人認可。シンクロ第1回パンパシフィック大会開催、水連50周年記念式典（岸記念体育会館）

1975
昭和50

第2回世界選手権開催、短水路日本記録を公認、第1回全国測量者会議

1976
昭和51

モントリオール五輪、シンクロ第2回パンパシフィック大会開催、第1回全国遠泳大会開催

1976 ロッキード事件が表面化

1977
昭和52

ユニバーシアード、第1回FINA、第1回水泳科学研究会開催、教士、範士制度制定、有功章発足、共済会発足

1977 後藤忠治氏、セントラルスポーツクラブ代表取締役社長に就任

1978 日中平和友好条約を調印

1979
昭和54

第4回パンパシフィック大会、第1回ジュニアオリンピック春季大会開催

1980
昭和55

モスクワ五輪開催（日本不参加）

1982
昭和57

第1回日中対抗、第4回世界選手権、日本高校50周年記念大会開催

1982 東北、上越新幹線が開業

1984
昭和59

ロサンゼルス五輪開催、五輪にシンクロ（ソロ・デュエット）種目決定、第1回全国女子水球大会開催

1984 香港が中国に返還される

1985
昭和60

古橋廣之進7代目会長に

1986
昭和61

第5回世界選手権（マドリード）開催
FINA GWL 世界マスターズ大会（東京）開催
開かれた水連を目指して地域会議開催

1987
昭和62

記録集計コンピューター化

1988
昭和63

ソウル五輪開催
鈴木大地が100m背泳ぎで金メダル

1991
平成3

FINA競技規則改正（スタートは3回から2回へ）

1992
平成4

バルセロナ五輪開催

1993
平成5

東京辰巳国際水泳場会場完成
第1回世界ショートコース大会（バルマ）開催

1994
平成6

創立70周年

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996
平成8

千葉県国際総合水泳場が完成
第26回アトランタ五輪でシンクロが銅メダル獲得

1997
平成9

日本短水路選手権から「スタート1回制」導入

1998
平成10

泳力検定がスタート、横浜国際プールが完成

2000
平成12

シドニー五輪で中村・田島が銀メダル。中尾、女子メドレーリレーが銅メダル、シンクロは銀2個獲得

2001
平成13

世界水泳選手権大会「福岡2001」が開催。日本勢はシンクロ金1、銀1、銅1。競泳が銅4、飛込は銅2個獲得。イアン・ソープ選手が最優秀選手に選ばれる

2002
平成14

第14回アジア大会（釜山）北島が200m平泳ぎで世界新、アジア大会 MVP

2003
平成15

第10回世界水泳選手権（バルセロナ）北島が世界新記録でダブル金、シンクロは金1、銀2個獲得

2004
平成16

サイクルスポーツセンタープールが24年の歴史に幕

アテネ五輪で北島選手が2種目で金、柴田選手は女子自由形で初の金、戦後最多の金3、銀3、銅4の10個獲得

2006
平成18

FINA シンクロワールドカップ横浜で開催

水泳の歴史

2008

平成20

北京五輪で北島選手が2種目連覇、
金2、銀3個獲得

古橋名誉会長が文化勲章を受賞
(スポーツ選手では初)

2008 後藤忠治氏、
財団法人社会スポーツセンター会長に就任

2008 リーマンショックが起こる

2009

平成21

古橋廣之進記念浜松市総合水泳場
(ToBiO)が完成

競泳日本代表チームの愛称を
「TOBIUO JAPAN (トビウオジャパン)」に決定

古橋名誉会長が世界選手権(ローマ)の
大会会期中に急逝

2011

平成23

主要大会を東日本大震災復興支援チャリティー
大会として実施

2012

平成24

ロンドン五輪、男子200m平泳ぎ入江陵介、
女子200m平泳ぎ鈴木聡美、男子4×100m
メドレーリレーで銀メダル。銅メダルは8個獲得

後藤 忠治 (ごとう・ただはる)

1941年東京都生まれ。日本大学を卒業後、大丸百貨店入社。64年、東京オリンピックに出場。69年、セントラルスポーツクラブを創業し、77年に代表取締役社長に就任し現在に至る。日本スポーツクラブ協会理事などを歴任し、2008年より財団法人社会スポーツセンター会長。

西田 善夫 (にしだ・よしお)

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』（丸善）ほか。

山本 尚子 (やまもと・なおこ)

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

フォート・キシモト (写真提供)

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作 公益財団法人 笹川スポーツ財団

後援 文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、
特定非営利活動法人 日本オリンピックズ協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会

メディア協力 (株)共同通信社、サンケイスポーツ

特別協力 (株)アシックス、(株)伊藤園